



# 演技の極意

9月28日  
Sudden Fiction Project

高階 經啓  
hirotakashina

憂鬱だ。だいたい大勢でつるんで何かをするのって性格的に合っていないんだ。群れるのもキライだし群れて大層満足そうにしている人の顔を見るのもうんざりする。群れたことで強くなった気にもなるのか横柄な態度を取るやつなんてもう最悪だ。えてしてそういうやつは群の仲間以外には排他的になるし仲間に加えるときには妙に恩着せがましかったりする。ぐったりしちゃうんだよな、そういうのを見ると。

だからぼくはそういったこと一切からできれば距離を取りたいと願っているのだが、今回の件に関してだけはなぜか母が頑として認めない。

「たとえお天道様が許してもね」母は言う。「孟宗竹は孟宗竹にほかならないのよ！」

多くの人にとってまったく意味不明だと思うが（そして慌てて付け加えるとぼくにとっても意味が不明なことには変わらないのだが）、ここで母が言いたいのはただ一つ。群れたくないというぼくの考えを却下するということなのだ。

「ぼくがそういうの一番苦手だってわかってるくせに」ぼくだって引き下がるわけには行かない。「苦痛だし、苦痛だってことが顔に出るからまわりも迷惑する。何もいいことなんてないよ」「おだまり！」その言葉の響きが気に入ったのか、母は続ける。「おだまりおだまりおだまり」「おだまりは、わかったよ」「おだまり！」

結局、反論空しく、ぼくはおたのしみ会に出ることになる。そのためには練習に付き合わなくてはならない。白雪姫と七人のこびとたちが悪い魔女の噂話をするシーンだ。あ。言い忘れていたけど、ぼくは南山手幼稚園の年長さんで、これが最後のおたのしみ会なのだ。おかあさんがたも先生もこれが最後だというので熱が入っていて、その熱気も暑苦しくてぼくはげんなりする。母はその盛り上がりとは一線を引いているようだった。あんなにぼくには出る出るとけしかけたくせに。

ぼくとしては黙ってじっとしてられさえするならテーブルの役でも壁の役でも良かった。ところがなんと全員にセリフが回るように一つのキャラクターを3人に分けて演じるという。そのせいでぼくにもセリフのある役が回ってきてしまった。「おこりんぼ」の役だ。先生にも少しは見る目があるらしい（あるいは日頃のぼくの態度に対する皮肉のつもりなのかもしれない）。

ぼくに振り当てられたセリフは「気に入らないな」の繰り返しだった。ほかのこびとの提案に対しても白雪姫の呼びかけに対しても「気に入らないな。気に入らないな」というだけのものだ。これについては実は少し気に入ってしまった。心から感情を込めてしゃべることができるので。思いがけず熱心に参加するぼくを見て先生も安心したんじゃないかな。

さて、おたのしみ会の当日になって、なぜ母がそこまで入れ込んでいたのかがわかった。母は誰が見てもあのディズニー映画の白雪姫だとわかるコスチュームを着て現れたのだ。そんなことがしたかっただなんて。考えられないことだ。いつの間に用意したんだ、そんなもの。他のおかあさんがたも引きまくっていたが、何人かに「自分でつくったんですか、お上手ねえ」と言われて素直に喜んでる風だった。

ところが事態はすんなりとは進行しない。全員参加作品『白雪姫』が始まって間もなく、白雪姫（2番目）の子がセリフに詰まってしまった。その場に立ちすくし誰かに助けを求めることもできない。一気に緊張が高まった。客席の保護者たちがはらはらしているのがわかる。「がんばって」「しっかり」などと声をかける親もいるが、白雪姫2は完全に委縮して何もできなくなった。

「わたしもそうだったわ」

その時、おたのしみ会の雰囲気とはそぐわない、低く落ち着いたトーンの声で女の人がしゃべ

りだした。言うまでもないだろうが、もちろんぼくの母だ。  
「何も言えなくて、頭の中が真っ白になって、まわりで何か言っているのも耳に入らなくなったの」

不思議なことにその声は白雪姫2の耳に入ったようで、白雪姫2は母を見上げた。巨大白雪姫であるところの母はいつの間にか立ち上がって客席をかき分け舞台へと歩み寄り、白雪姫2の前に立ち、まるでフェアリー・ゴッドマザーみたいな感じで話しかけている。

「終わった後で死のうかさえと思ったわ。でもね、それは違ったわ。死にたいくらいつらかったけど、死ぬことはそれよりもっとこわかった。死ぬほどこわかった」何を言っているんだ。ぼくは舌打ちをしたい気分になった。こっちの方が死にたいよ。「でもね、それでいいのよ。さあ、叫んでご覧。『エスクレメントー！』」

白雪姫2がつられて叫ぶ。

「『エスクレメントー！』」

「『エスクレメントー！』」

「『エスクレメントー！』」

そうして母は席に戻って座り、白雪姫2は奇跡的にセリフを思い出した場面はつながった。

晩ご飯の時に母に聞いてみた。

「『エスクレメント』って何？」

「糞ってことよ。イタリア語で畜生みたいな意味なんだって。筒井康隆が書いてた」

「はは」ぼくは力無く笑う。「で、おかあさんがセリフに詰まったのって、やっぱり白雪姫だったの？」

「ええ？」母は何を言っているんだこの子は、という顔つきでぼくの方を見て、それから理解したらしくうなずく。「おかあさんはね、おたのしみ会なんて大嫌いだから出なかったのよ」

(「おたのしみ会」 ordered by ariestom-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

## 感謝の言葉と、お願い&お誘い

---

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブックログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただけると大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできるのですが、面と向かって星をつけるのはひよっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験

済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上げてまいりましょう。

## 演技の極意

<http://p.booklog.jp/book/34704>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/34704>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/34704>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.